

第3章 京都大学医学部構内AQ17区の発掘調査 I

伊藤淳史 笹川尚紀 長尾 玲

1 調査の概要

今回の調査区は、医学部構内北辺の中央やや西寄り付近、鴨川からは東方400mあまりに位置し、吉田橋町遺跡として周知される範囲に含まれる（図版1－522，図18）。今回この地に、医学部創立125周年記念事業として多目的施設棟の新設工事が計画されたため、2025年1月30日から4月4日にかけて発掘調査をおこなった。調査面積は337㎡。出土遺物の総量は整理用コンテナで33箱であった。

これまで周辺では、東側隣接の358地点や南側の308地点の調査において、中世の井戸や柱穴など多数の遺構とともに、土師器や瓦類を中心とする大量の遺物出土が確認されており、今回もそうした中世遺跡の広がりが及んでいることが十分に予想された。また、北東－南西方向に医学部構内の北辺を画して調査地北側をはしる街路は、平安後期以降に明瞭となってくる京と近江を結ぶ古道の白川道（志賀越え道）として知られており、関連する路面や側溝などの遺構や、道沿いの詳細な様相確認が課題となるところであった。

調査の結果、調査区南半の幅5mあまりの範囲は、1970年代までこの地にあった薬理学教室校舎の基礎により深さ2m以上が掘削され、遺跡は完全に滅失していた。また調査区

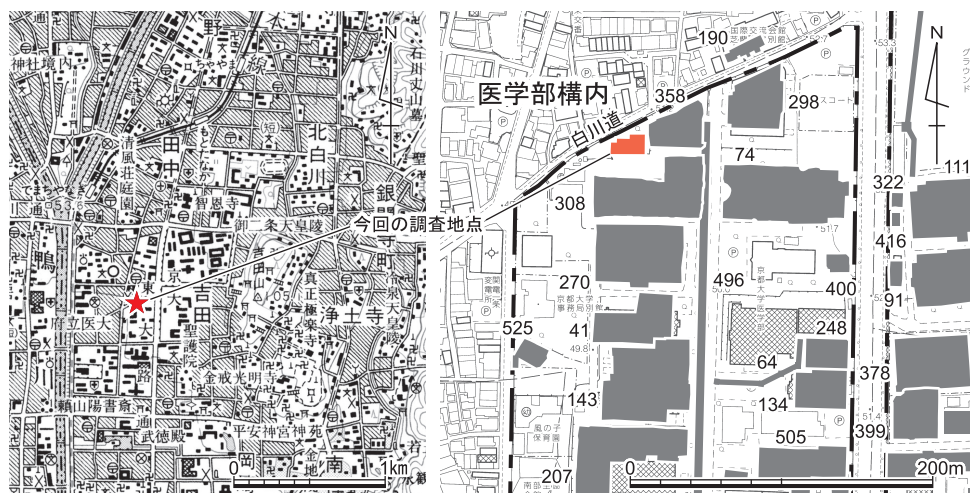


図18 調査地点の位置 縮尺：左1/5万，右1/5000

中央付近も、深い複数の管路攪乱が東西にはしっており、発掘調査の対象とできたのは全域の半分程度であった（図版6-1）。しかし、遺存していた範囲では、中世の遺物包含層が厚く堆積するとともに、層内やその下面において、土器溜や集石、土坑、柱穴が多量の遺物をともない密集して確認された。中世において道沿いが積極的に土地利用された状況とそのひろがり把握する上で、貴重な情報を追加できたと言える。

なお調査は伊藤淳史と笹川尚紀が担当し、長尾玲が補佐した。ほか発掘及び整理には、磯谷敦子、河野葵、小出来恒平、小山賢太郎、山口匠、山中楓大、和田一希の助力を得た。本章の編集と執筆は、部門教員と補佐員の協力のもとに伊藤がおこなった。

2 層 位

調査区北壁の西半部分（図22-aa'）と、東壁の南半部（同bb'）についてを示す（図19）。

前者については、北側をはしる白川道に関連する可能性が考えられる硬化層や流路断面などが西辺部に現れており、後者には中世井戸の断面がかかっているため、抽出した。

基本の層序は、上部については東に隣接する358地点とほぼ同じであり、また北壁・東壁とも共通する。第1層（表土・攪乱）が近代の大学設置以降、第2層（灰褐色土）が近世の、第3層（黄灰色土）が中世末～近世初頭頃とみられる堆積である。うち第1層は1m近くあるが、上部は最近の駐車場整地にもなうバラスとアスファルト層が60cmほど占めており、大学本来のかつての地表面はその下面、現地表下60cm付近とみてよい。その下40cm程には、小規模な煉瓦建物の基礎や大学関係の廃棄物などが認められる。第2・3層は中世末以降の耕作にもなう層で、包含遺物はきわめて少ない。第3層の黄灰色土は、今回の調査区では薄くしか確認されず、おもに鋤溝群の埋土として確認されるにとどまった。

第4～7層は中世の遺物包含層。とくに第4層（茶褐色土）は、構内遺跡でひろく認識されている砂質の遺物包含層で、酸化鉄が集積沈着したことによる赤褐色系の色調を呈し、多量の土師器細片を含んでいることを特徴とする。その下部の第5層（黄褐色土）との関係は、色調の違いのほかはおおむね特徴を同じくし、漸移的に移行しているため、中世末以降の上部の耕化化にもない床土の様相を呈している部分を中心に茶褐色土と認識されている、と評価する方がふさわしいかもしれない。なお東側の358地点では暗茶褐色土としているものが相当する。

それらよりの下部の第6層（褐色砂質土）・第7層（明黄褐色シルト）・第8層（黄褐色粗砂）は、少量の中世遺物を包含しているが、基本的には調査地の基盤となる砂礫層が堆

層 位

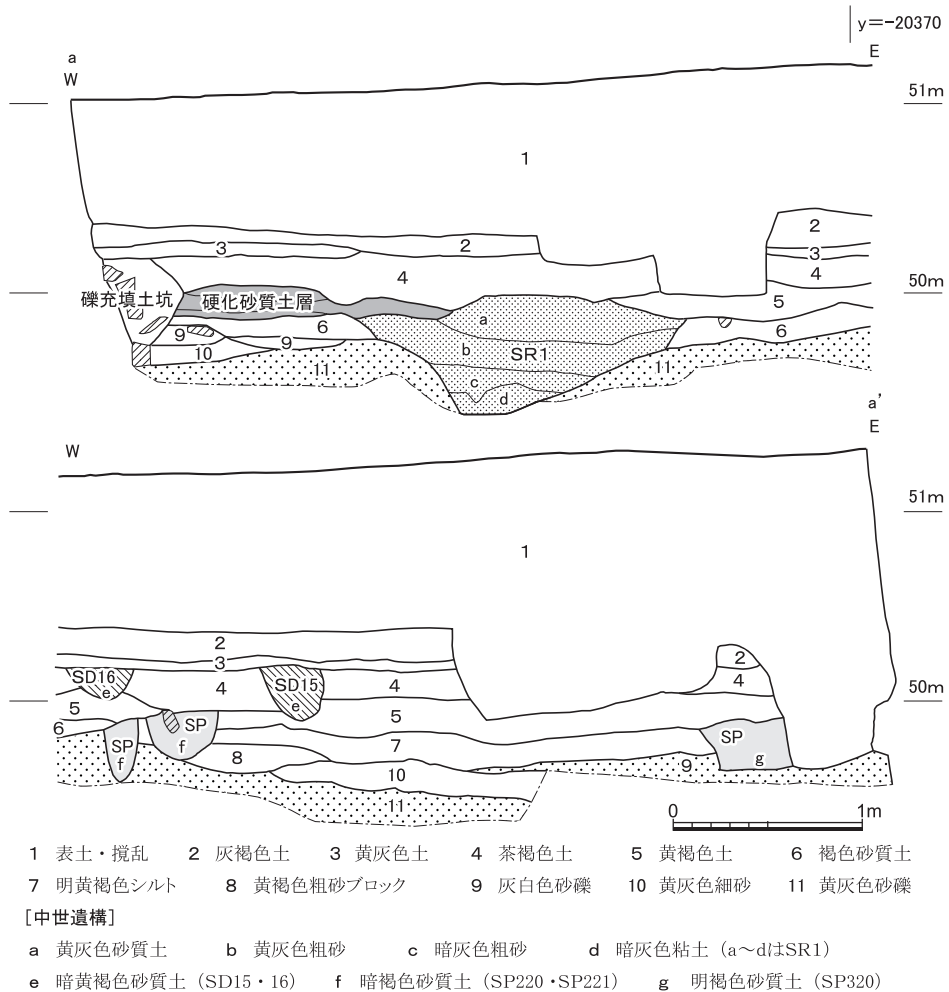


図19 調査区北壁西半（図22 a-a'）の層位 縮尺1/40

積後、河道から離水して安定していく過程での自然堆積に由来するものと考えられる。中世前半期にはじまる開発の過程で攪拌を被った層、と考えられる。

第9層（灰白色砂礫）と第11層（黄灰色砂礫）は、20cm台程度までの多数の礫と粗砂をまじえた砂礫層で、磨滅した古代以前の土器片が稀に見出される。間層として介在する第10層（黄灰色細砂）とあわせて、東方を流れる鴨川がこの地まで及んでいた頃に堆積し調査地の基盤を形成した堆積である。

以上の層準で掘り下げていく過程で、第4層上面ではおもに黄灰色土を埋土とする東西・南北の鋤溝群が多数検出された。また、第4層内～第5層上面にかけてでは中世後半

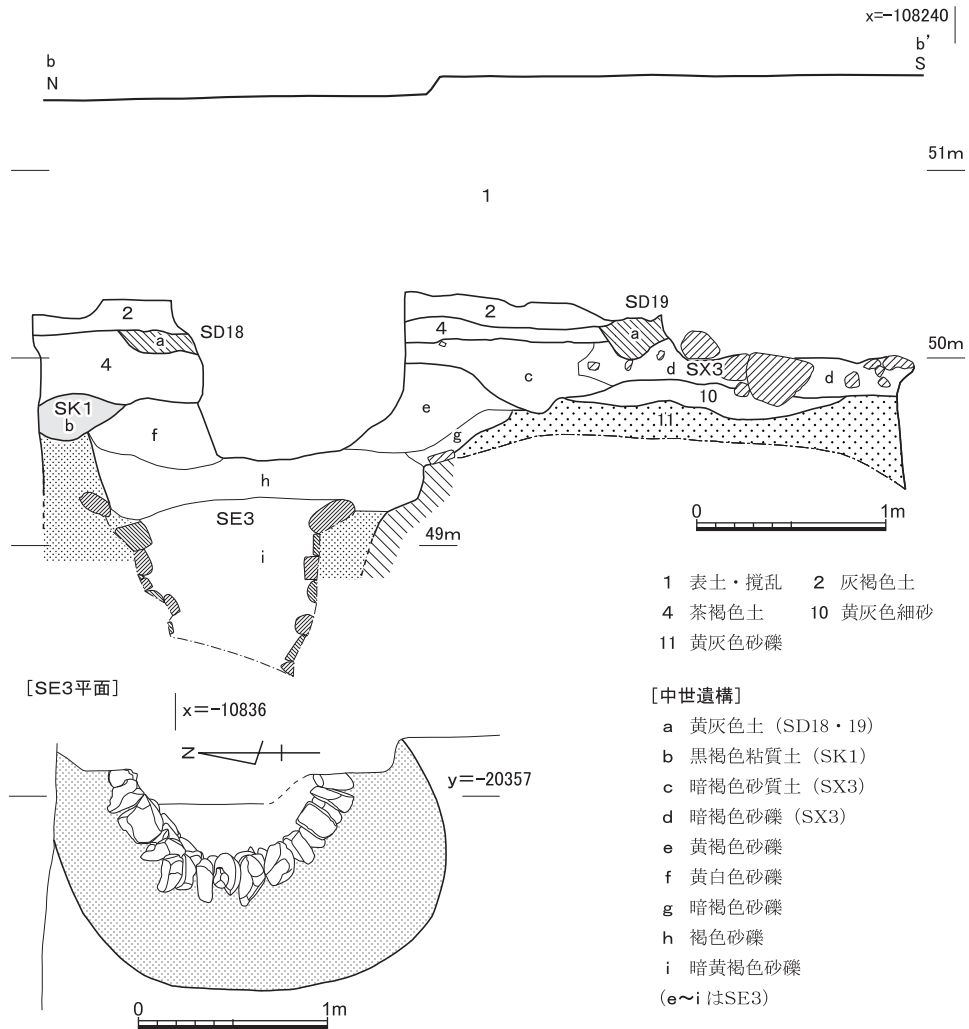


図20 調査区東壁南半 (図22 b-b') の層位とSE3平面 縮尺1/40

期を中心とする集石や土器溜が、第5層～第6層にかけてはおもに中世前半期に比定される多数のピットや、硬化面、井戸、流路などが確認されている。これらについては、次節において埋積の様相も含めて報告する。

3 遺 跡

調査では、表土・攪乱の除去後、まず第3層黄灰色土の上面で、灰褐色土を埋土とする近世遺構の検出をおこなった (図版6-1)。ごくわずかに小ピットと溝、野壺であった

可能性のある円形土坑の断片が確認されるにとどまり、出土遺物も微量であった。ここでは記述にとどめ遺構・遺物の報告は割愛する。

その後第4層茶褐色土、第5層黄褐色土、第5～8層掘り下げ後の基盤砂礫層など、のそれぞれ上面で中世の遺構検出をおこなっている。以下にそれらを詳述する。

(1) 中世の遺構（図版7・8、図21・22）

中世の時期については、出土土師器の様相にもとづく以下の大別4段階の時期区分で記述する。なお東側358、南側の308地点で用いた区分〔伊藤2008〕におおむね準じているが、平安京の土師器編年の更新〔平尾2019〕をふまえて暦年代は若干修正している。

中世1期 一段撫で手法D類土師器皿が主体で、二段撫でC類も微量ともなう。白色系碗類は未出。平安京編年の6A、暦年で12世紀後葉。

中世2期 一段撫で手法E類や、白色系碗類が出現しているが凹み底小碗は無い。平安京編年の6B～6C、13世紀前半。

中世3期 一段撫で手法E類に、白色系碗類の各種が組成。平安京編年7A～8B、13世紀後半～14世紀代。

中世4期 一段撫で手法F類およびそれ以降の時期の土師器が主体。平安京編年9期以降、15世紀代以降。

今回は、中世1期と2・3期、4期で遺構図を作成した（図21・22）。2・3期については茶褐色土中や黄褐色土上面で検出された遺構であり、出土遺物に土師器の白色系碗類がまとまって含まれている。1期については、黄褐色土以下の基盤の砂礫層まで複数回検出を繰り返して見つけた遺構となり、出土遺物に土師器の白色系碗類が含まれていないものである。ただし、それらのうち一部には、上面で検出しきれなかった2・3期に掘削・攪拌した遺構で、遺物は1期のもののみ包含している状態のものがあることも十分想定されるが、峻別できない。全体遺構図として1期の密度が濃くなっているのは、そのような事情が反映している。また根石や礎石を据えたのみで微量の出土遺物しかない柱穴遺構については、いずれの細別時期かは判別しがたいないため、双方の図に示した。

中世4期の溝SD4～27（図版6－2、図21） 黄灰色土を埋土とする東西・南北方向の溝群で、茶褐色土上面で検出された。耕作の鋤溝に類する遺構群だろう。いずれも真北からは大きく西へと振れる方位で、調査区北側をはしる白川道とおおむね並行ないし直交する方向である。幅・深さとも最大で30～40cm程度。東西方向の溝SD4・5が、互いに2m程度で並走して深く明瞭であり、その他のものは浅く不安定なものがほとんどであ

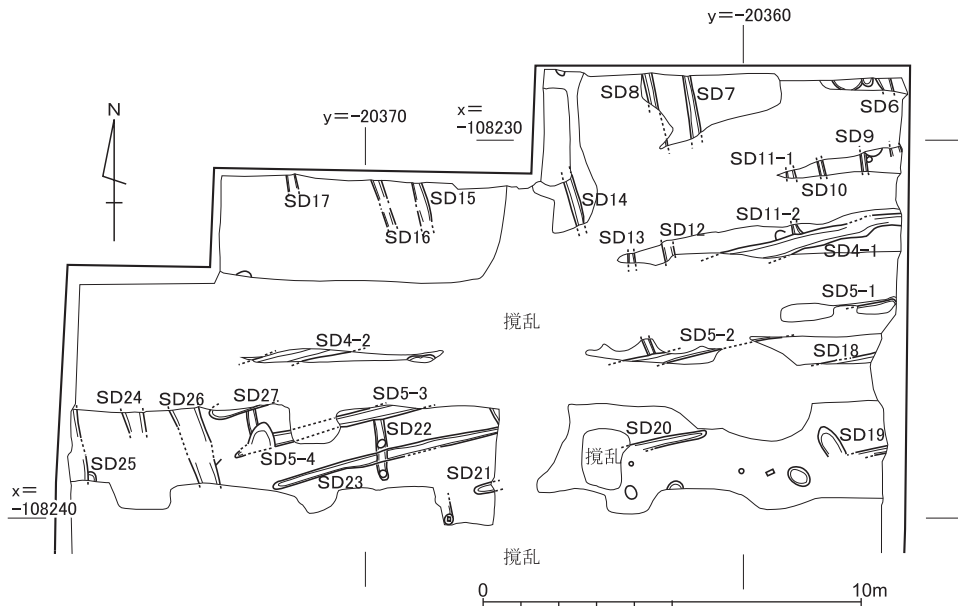


図21 中世末～近世初頭とみられる遺構 縮尺1/200

る。しかし、この両溝とも調査区西壁付近では途切れるようであり、そこには南北溝SD24～26がはしっている。地割の単位を反映しているのかもしれない。検出した層準と包含する遺物から、おおむね中世末～近世初頭の遺構群に比定しておきたい。

中世2～3期の土器溜と集石（図版7・8，図22上段） 土器溜は、土師器碗皿類が整理箱1～2箱程度の分量で密集しているものが主で、第4層の茶褐色土中から第5層の黄褐色土にかけてで見出される。不定形ではあるが掘り方の確認されるものと、層内で遺物集中部として把握されるのみで掘り込みの不詳なものがある。SK1は前者であり、幅1m程度を深さ50cm程度まで掘り下げた土坑内に、横倒しの高坏と、口を上に向けた状態の碗皿類が重なりつつ並んだ状態で検出されている。上面には破片も埋積していたが、下部は意図的に埋納したかのような雰囲気がかがわれる。SX1やSX4は後者であり、礫などもまじえながら破片が密集する。

集石としているものも同様で、SK2やSP276には掘り込みが検出できているが、SX2やSX3は層内に大小の礫がまとまる状態のものである。いずれも大規模なものではない。SP276には軒丸瓦が、SX2には陶器甕類の大破片も混在していた。SX3は東壁際で検出されたため全容が不明だが、上面が扁平な巨礫を並置したかのような状態であることから、沓脱石など建物関連施設の一部であった可能性もある。

遺 跡

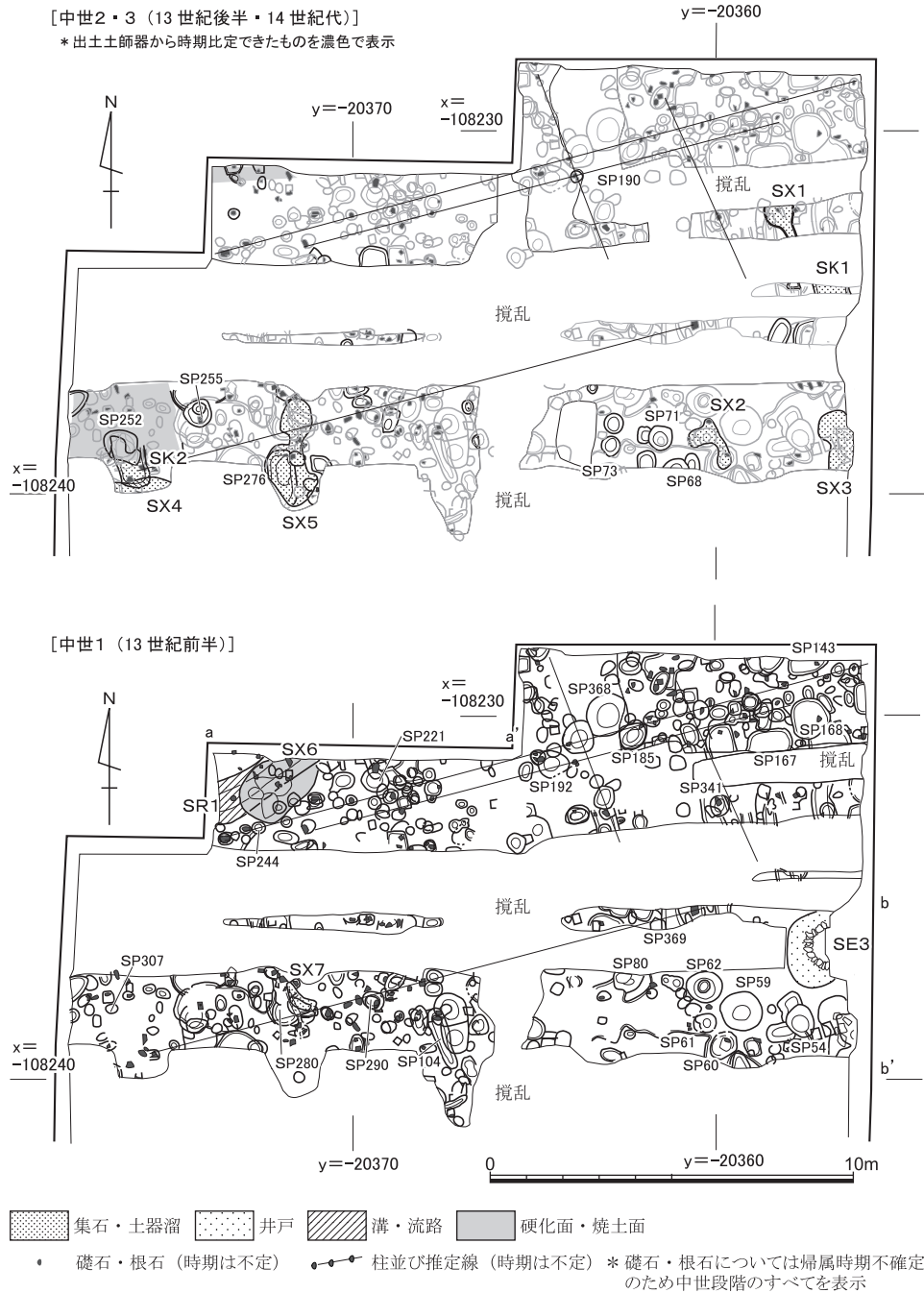


図22 中世の遺構 縮尺1/200

中世 1 期の遺構（図版 8，図20・図22下段） おもに黄褐色土上面やそれ以下で確認された遺構で，S Pとしている密集するピット群のほとんどがこの段階となる。ただし，既述のように中世 1 期の遺物のみしか出土していないものを比定しているため，その後に掘削された遺構も含まれることを見込んでおく必要がある。遺物の総量は多いが，土器溜のような集中部は認められない。S X 7 も，大破片や礫が散漫にまとまっていたものである。

井戸 S E 3 は石組み井筒の井戸で，東壁際で半分のみ検出されて全掘は不可能であった（図20）。壁面における断面での所見でみると，上部は砂礫で埋め戻されておりその後に中世 2 期以降の遺構が構築されている。

流路 S R 1 は，調査区北西隅で検出された幅 1 m 深さ 80cm 程度で基盤の砂礫を切って流れる遺構で，北東－南西方向にはしる。調査区北壁には断面が表れており（図19），内部は砂質土で埋積し，並行して硬化面があることも確認できる。ごく一部の検出であるが，中世段階の白川道南辺と側溝に相当するものと判断される。

炭集中 S X 6 としたものは，上記の S R 1 が埋積後の上面で，径 2 m 前後の範囲に炭化物や焼土が集中して確認されたものである。一部の範囲には厚さ 10cm あまりまで炭が堆積するとともに，著しく被熱した礫や鉄滓が認められる（図版 8－5・6）。層位では明らかに S R 1 に後出するものと認定できるが，出土遺物では中世 1 期のみしか出土していない。白川道に面するような至近の位置で，野鍛冶のような作業施設が存在したことを示す遺構といえよう。

（2）小 結

以上，おもな中世遺構について略述した。総じて東側に隣接する 358 地点と同じ様相であると評価できるが，井戸が壁面際で 1 基のみしか確認されなかったことは，空間の利用法が異なっていた可能性も示唆している。また，358 地点では瓦器の鍋や羽釜といった煮炊関連具の高比率が指摘されたが，今回はそれほどではなく，かわって陶器の大甕類が顕在化しているように感じられる。遺憾ながら遺物の整理が不十分であり，詳細は次年度年報において報告し，遺跡としての評価も行うこととしたい。